編集後記

今号の表紙は大城隆先生撮影の差羽（サシバ）です。沖縄の秋の季語サシバですが、眼光鋭い目が印象的です。

全国に先駆けて新型インフルエンザの混乱を乗り切りつつある沖縄。巻頭には緊急報告として、新型インフルエンザ流行の現状分析・対策について、感染患者の診療でパンク寸前であった那覇市立病院救急診療部に対し那覇市医師会の行った診療応援についての報告を頂きました。この連携はNHKの全国放送でも取り上げられました。

真栄田常任理事、松原忍先生には男女共同参画フォーラムからの報告を頂きました。医療再生のためには女性・男性医師それぞれの働き方を変え、また社会の意識の変化が大切で、そのために真摯な努力を行うことが宣言されたそうです。

県立南部医療センター・こども医療センター村尾寛先生からは性教育セミナー全国大会から、カップルで起きるDV「デートDV」の問題点などの話題を報告頂きました。

他の報告としては、宮城会長から九州医師会連合会常任委員会の報告、またトピックでもある九州ブロック学校保健・学校医関連行事について、有床診療所担当理事連絡協議会について、沖縄県・県医師会連絡会議について、なごみ会幹事会・懇談会についてを各役員にそれぞれ報告頂きました。

生涯教育コーナーでは平安病院波平智雄先生に「高次脳機能障害」についてまとめて頂きました。地域連携パス（脳血管障害）が県内でも構築されつつありますが、連携の問題などのシステム上の問題などが改善されるよう期待しています。

プライマリ・ケアのコーナーでは、琉球大学藤田次郎教授に「沖縄県喘息死0、および喘息発作による救急受診0をめざして－第3報－」について、喘息死患者、救急受診患者の年齢分布の解析、今後の課題についてまとめて頂きました。

インタビューは、上原秀政八重山地区医師会長に登場頂き、地域の大きな期待に応えていこうとする意気込みを語ってもらいました。

月間・週間行事のお知らせは盛りだくさんで、「目の愛護デー」について三愛眼科上野香先生に紹介頂き、視力障害のもたらす社会的損失をコストの面から述べられています。医療技術、器具の進歩により何兆円もの経済効果があるそうで、国・厚労省にとっても文字通り「目に見える経済効果」になる？。県立南部医療センター・こども医療センター與座浩次先生には「麻酔の日」についてのご紹介です。華岡青洲の100年前の沖縄の先人（高嶺徳明先生）の偉業は誇らしい限りです。

その他、骨と関節の日、臓器移植普及推進月間、骨髄バンク推進月間、沖縄糖尿病週間について各先生にそれぞれ紹介して頂きました。

若手コーナーには2題の寄稿です。プロジェクト群星指導医入江聰五郎先生からは臨床教育先進県沖縄の第一線の臨床教育のあり方、2題目は浦添総合病院2年目研修医山内素直先生に指導医と研修医の理想的な関係を「温度」という言葉でまとめてもらいました。研修医生活から離れて久しい会員の先生にも是非御一読頂きたい2題です。

地区医師会コーナーでは、「那覇市医師会チャリティー写真展」について沖縄赤十字病院知花朝美先生からご紹介です。会員からの参加が伸び悩んでいるとのことですが、県医師会報の表紙写真についても応募が減少しています。デジカメの普及している昨今、元気のあるアマチュアカメラマンの出現に期待しています。

本の紹介では石川広報委員からの紹介です。TUNAMIについてわかり易くまとめてもらいました。最近は先島方面での地震について耳にすることが多くなっており、タイムリーな本の選択だと思います。

随筆コーナーは2題。1題目は上海で行われたSLE国際会議の紀行文をおおうらクリニック大浦孝先生から、2題目は40年前にボリビア移民の琉球政府派遣医師を経験された勝連病院吉田朝啓先生の紀行文です。まるで小説の様に夢中になって読ませて頂きました。医師としておかれた環境で最善を尽くす姿勢など改めて感じさせてくれる作品です。

これまでになく医師会の医療的活動が注目されています。新型インフルエンザの流行、医療再建など大きな社会問題に対する医師会の役割はとても大きなものです。システマティックな活動のためには医師会内の情報の共有が大切で、その手段である本誌は医師会の情報発信の中心的存在です。本号の中にも重要性が高く、タイムリーな情報を掲載できたと思います。さらに会員の皆様の医療活動に役に立てる医師会報となれるよう、今後の医師会報編集・出版活動により一層のご協力を御願いします。

広報委員　比嘉 靖